



No.31  
2024・5

# ホーモイ通信

高齢社会をよくする下関女性の会  
(ホーモイ)

代表 田中隆子  
TEL/FAX 083-253-4892

URL: <http://www.yg-life.net/homoj/>

## 設立20周年特集

### 設立20周年記念事業に想う

私たち「高齢社会をよくする下関女性の会（ホーモイ）」は、「しあわせな高齢社会の創造」をテーマに、少子高齢社会にあって互いに支え合い、安心して生きられる地域社会の構築を目指しております。学習と実践を両輪に活動して参りました結果「介護予防のためのサロン」「市民福祉講座」「生野きらきら子ども食堂」等の事業を展開しております。

また「男女共同参画ネットワークさんしゃいん 21」や「認知症を地域で支えるまちづくり下関ネットワーク委員会」等の立ち上げに寄与し、少しずつでも地域社会に貢献できているのではないかと自負いたしております。

おかげさまで設立20周年を迎えました。その集大成の記念事業としまして、設立20周年記念フォーラム・祝賀会の開催及び記念誌を発刊致しました。

## 講演 1

# 91歳 老いてますます日々新た

講師 樋口恵子氏 NPO法人高齢社会をよくする女性の会理事長

樋口恵子氏はフォーラム当日、体調の都合上、リモートでの参加となりました。

御年91歳でありながら、まだまだ現役で男女共同参画審議会のメンバーを努め、女性の地位向上のために尽力し、社会的発信を続けていらっしゃいます。樋口氏は冒頭で「ホーモイ20周年おめでとうございます。何より困難な中で20周年を迎えられた皆様、会員のご努力に心より敬意を表します。考えようによってはホーモイの皆様は、一番やりにくいところで、一番大事なことをなさっておられると思います」と述べ、要旨以下のように話されました。

### 女性たちが知恵をしぼって創設した

#### 「介護保険」

今日は上野千鶴子さん、富安兆子さんという講師をお迎えして、日本のこれからを考える、そのための知恵を絞る場です。介護保険は、優秀な女性たちが知恵をしぼりにしぼって考えたものです。全人口のうち65歳以上が3割を占めているのは今のところ日本だけです。ただし世界の先進国だけでなく、私たちと地理的に近い新興のアジアの国々なども人口高齢化に直面しています。私たち日本は、その世界のなかでいったいどのような例を示していけるでしょうか。男女の平均寿命が日本で6、7歳違います。65歳以上の高齢者の3分の2が女性です。私たちは20年前にご理解のある政

治家の方、市民の方たちと一緒に「みんなで支え合おう」という介護保険制度をつくりました。

日本という社会は、女の人も男の人も働いて税金を納めても男女平等な労働政策ができなかったことが北欧諸国や欧米先進国と大きな差がついてしまった結果だと思います。今こそ女性の地位を変えていく最後のチャンス。男も女も勤労の権利を手にし、払うべきものは払い、持つべき住宅を皆がもち、受けるべき年金や社会福祉、介護保険サービスを受けられることが大事なことです。

### 世界中の高齢者たちが生きるために大切な

#### 3つの「しよく（食・職・触）」

これからの地域社会で、世界中の高齢者たちが生きるためには、3つの「しよく（食・職・触）」が大切だと思います。

高齢社会をよくする下関女性の会(ホーモイ) しあわせな高齢社会の創造  
設立20周年記念フォーラム  
高年齢世代の知恵と経験に学ぶ  
講演 私たちがつくった介護保険、私たちが守る  
講師 上野千鶴子氏(国立FPA人・メンタルケアネットワーク「MAN」代表)  
91歳、老いてますます日々新た  
講師 樋口恵子氏 (NPO法人高齢社会をよくする女性の会理事長)  
高年齢 少子超高齢・人口減少社会を生き抜くために  
講師 樋口恵子氏 富安兆子氏 上野千鶴子氏  
2023年  
9月30日(土) 13:00~16:30 (受付開始12:30)  
下関市民会館 大ホール (無料 500円)  
主催 高齢社会をよくする下関女性の会(ホーモイ)  
後援 山形県・社会福祉法人山形県共同福祉会・下関市・下関市教育委員会  
下関市社会福祉協議会・男女共同参画ネットワーク下関さんしゃいん21  
認知症を地域で支えるまちづくり下関ネットワーク委員会  
下関子ども協賛所づくりネットワーク協議会  
お問い合わせ 田中隆子 TEL/FAX 083-253-4892



### ●1番目の「しょく」は「食」です

なんといっても食事がきちんとできることが老後の健康においてなによりも大事なことの一つです。私の夢は、地域ごとに歩いていけるとところに近所隣誼い合っている場所におしゃべりをしながら食事ができる、口を動かしながら食べる、情報交換をしていく、食が地域社会をつくることです。とくに「食」は高齢者の地域住民が人間関係を広げていく大事な視点だと思っております。

### ●2番目の「しょく」は「職」です

日本が負けてポツダム宣言を受諾したとき「女性に選挙権を与える」「政治の面で女性を解放せよ」といい、次々と女性の地位が上がりました。教育でも男性も家庭科を、女性も技術科を学ぶように変わりました。政治の世界も憲法が改正され民法が変わり、相続が男性だけでなく女性も相続する権利を手に入れました。

ところが変化しなかったのは働く女性の地位でした。男女同一賃金という言葉はいわれたけれど、実質的なものではありませんでした。私は憲法のなかで、憲法27条の「勤労の権利」の条文が一番好きです。27条には「すべて国民は勤労の権利を有し、義務を負う」とあり、男も女にも特権を与えておりません。それなのに今に至るまで女性の年金と男性の年金の制度そのものが違ってあります。例えば日本には男女定年差別というのがございました。「男の人は定年50歳、女の人は定年45歳」という内規のある会社があって、それと果敢に闘ったのは女性の労働者でありました。その後、男女雇用機会均等法が施行されるまで結果としてこの差別は残り続けたのです。

### ●3番目の「しょく」は接触の「触」です

これは人々が出会い、語り合い、論じあい社会問題、政治問題としてみんなで解決していこうという民主主義社会の当たり前の方法です。「触」ということでは、女性の方が長い間の近所付き合いやボランティア活動などで経験も豊かかもしれません。以前、日本で差別されている若年定年の女性たちの権利をめぐる裁判をしました。初めは負けておりましたが、ある時期からしっかりと勝訴するようになりました。それは海外からの女性たちの応援も背景にありました。女子差別撤廃条約を日本でも批准せざるを得なくなり、国際情勢も味方してきたのです。1985年に日本が女子差別撤廃条約を批准したことにより、男女の差別的待遇が国際条約上も解決したのです。日本の女性が働いて生きているという基本的な権利を取り戻し、長いながい差別が解消してからまだそう時間はたっていません。私たちは女性が働きにくかった長い歳月がいまどんな影響を与えているかを考えていただきたいと思っています。例えばそれは今の同じ65歳以上でも持ち家率が男性の方が高く大半が持っているのに、女性は持ち家率が格段に少ないのです。年金の平均値から見ましても、

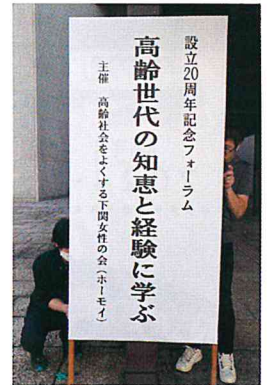
高齢期の女性が男性と平等になっていくには少し時間はかかるかもしれません。

コミュニケーションが得意なのは女性なのでむしろリードして、男性にとってもコミュニケーションという意味での「触」は、老後の生きがいにつながることで。65歳、75歳以上の生き方は圧倒的に女性が多いので、女性の生き方が高齢者として相応しくないと、日本の高齢社会そのもののあり方がひずんでくると思います。男性も女性も人々と交流し、世界一の高齢社会を乗り切っていくためにはやはり人々がコミュニケーションをよくして情報を共有し、世界一豊かな高齢社会をつくっていく、それを目指していこうではありませんか。

### これからの社会に挑戦

戦後、男女平等がうたわれながら実質的に賃金格差は歴然として残り、その上に家事、育児、さらに親の介護という労働が女性の方にのしかかりました。その状況を少しでも改善するために、介護の社会化をめざして粘り強い運動と情熱によって介護保険を創設しました。またこれから世界一豊かな高齢社会を目指していくための方策として、食べること、働くこと、人と人がつながっていくことを3点にしぼって提起します。とくに近所づきあいや身近な人とコミュニケーションをとって情報を共有していくこと、一人ひとりの小さな実践の積み重ねが大切です。

最後に「20年前に介護保険を成立させるとき、日本の女性たちがみんなで声をあげてつくった。その伝統を受けて心意気のある日本の女性たちと介護保険をつくりあげた実績をもってこれからの社会に挑戦していこうではありませんか」。





# 私たちが作った介護保険 私たちが守る

講師 上野千鶴子氏 認定NPO法人ウイメンズアクションネットワーク(WAN)理事長

## ◆介護が対価をともなう仕事になった



20年前にスタートした介護保険。それが、史上最悪の介護保険改定が目の前で起こなわれようとしている。日本の介護保険は、最初は税か保険かと大騒ぎしたが、保険方式にして結果よかったなと思う。介護保険の初期のころ「他人を家の中に入れる者はおらん」という声もあった。けれどもわずかな期間で権利意識が高まった。サービスは全部アウトソーシングして事業者

に委ねるという方法をとった。結果的に利用者さんと事業者さんが契約をして、ヘルパーを派遣する形にした。ヨーロッパなどでは自分で直接ヘルパーを雇う制度があるが、やはり利用者が事業者と契約したことは良かった。そして簡単な研修であっても有資格者しか働けないという制度にしたのも本当によかった。「介護は誰でもできる単純労働、(ここに女なら)」と思われていたものがプロの仕事、対価をともなう仕事になった。お世話をしてもらったらタダではないという常識ができた。

介護サービスを使わないことを前提に家族介護者の方に現金給付をする計画があったが、その選択肢があるドイツでは家族給付の受け取り率が5割ほどだ。だが家の中は闇だ。そのなかでネグレクトや虐待があるかもしれない。樋口さんの名言だが、「家族の闇に(他人の目という)サーチライトが入った」のだ。

ただし介護保険で困ったことも起きた。家族の求めるニーズのベスト3は、まず「施設」、次が「ショートステイ」、その次が「デイサービス」だ。この三つの共通点はちょっとでもいいから家から出て行ってほしいというものだ。その施設って誰のためのサービスなのか。本当にご本人のためのサービスなのか、それともご家族のためのサービスなのかと思った。介護保険前は親を施設に預けることに対する「姥捨てスティグマ(差別・偏見)」があったが、今は堂々と「親を施設に預けています」と言えるようになった。

介護保険は欠陥だらけで問題はある。でもあってよかった、もう今さら介護保険がない時代に戻れないほど、介護保険の恩恵を実感しておられるはずだ。今から思えば1997年によくぞ法律が通ったと思う。介護保険は年金保険、健康保険と並んで、強制加入の国民皆保険制度だ。お互い様、国民連帯というものがあるからこそ初めて成り立つ。この健康保険が存在しないの

がアメリカで、保険は民間だ。健康保険に加入していない国民が3,000万人おり、お金持ちほど健康リスクが低い。あれから20年後の今日、日本は格差社会という現実と直面している。同じ法律が今出てきたらもう通らないのではないかと。あのときが千載一遇最後のチャンスだったのではないかと、歴史をふり返って思うようになった。

## ◆23歳となった介護保険制度の現在地

介護保険は23歳でエライ目にあっている。介護保険は3年に一回の改定のたびに改悪されている黒歴史がある。とくに報酬はマイナス改定つづきだ。第一回から利用抑制に転じし、軽度者の要介護1を要支援1、2に移した。そこに介護予防事業という訳のわからないものが出てきた。介護の必要な人に出すものを「予防」にお金を使っていいということになった。このあたりから「不適切利用」という言葉が出て同居家族がいたら「家事援助」はできないとか、利用抑制に切り替わったなどだ。

2011年にはサービス付高齢者向け住宅が雨後の竹の子のようにでき、施設は作りすぎると、介護保険料が上がる、高コストを抑制するために総量規制をしたところ待機高齢者がどっと増えてそこに建設業界の方たちが入った。介護のノウハウも実績もない方たちが参入した。その後2014年に医療介護総合確保推進法ができ厳しくなった。要支援1を介護保険から外し入居条件を厳格化した。要介護3以上は待機高齢者数とその前年度52万人で翌年29万人に激減した。ただの数字合わせだ。特養にお金がかかるようになった。2割負担の人が出てきた。療養型病床廃止といったが、いま介護療養院といのが増えている。2017年には3割負担も出てきて、介護医療院というのも出てきた。背景には医師会の圧力がある。いよいよ2020年、コロナ直前に第6回改定があり、要介護1、2を外す、ケアプランを有料化、2割負担を増やすというのが出てきて猛反対が起きた。だいたい政府はこういう案をチラつかせて様子見をして引っ込める。いよいよ来年、2024年に改定が起きる年だ。ここで今出ている改悪案が要介護1、2を介護保険から外す、原則1割負担を原則2割負担にする(3割負担も増える)だ。医療保険に合わせて介護保険も2割負担にするというのだ。そして福祉用具を買取にする。ふざけるなと思う。あともう一つ恐ろしいことが施設で起きている。後でお話いたします。

## ◆制度を空洞化させてはならない

2020年コロナ直前に、この動きは見過ごせないと私と樋口恵子さん、大熊由紀子さんの三人で改悪を許さない





と院内集会をやり 300 人の会場を埋めた。この時の抗議声明を起草してくださったのは樋口さんで、「このままでは、お家がだんだん遠くなる」という名言をいった。在宅でいられないということだ。それからコロナに突入して 3 年たって去年の秋に、社会保障審議会介護保険部会に出してきたのが、第一に対象者を要介護 3、4、5 の重度者に限定する気だ。次は軽度者外し、訳のわからない地域支援事業、総合事業というところに丸投げする。つまり生活援助を外したいようだ。デイサービスと訪問介護を地域のみなさんが助け合いでやれと言っている。どこにそんな人がいるのか。おそらく「身体介護」に限定したいと思っているのだろう。いま 9 割の人が原則 1 割負担だが、これが 2 割負担になる。要介護 5 の方は、今 36 万円で 1 割負担、3 万 6,000 円だ。これが 2 割になると 7 万円を超す。支払いの能力ある人がどこにいるのだろうか。場合によっては、3 割も増やすと言っている。今だって要介護認定を受けても 1 割負担が重くて先に進まない人がいるのに、ケアプラン有料化になれば、最初の敷居がますます上がる。つまり制度があっても使えない「制度の空洞化」だ。

介護保険はケアの社会化の第一歩だった。脱家族化というが、これが押し戻されると第一は再家族化でまた介護離職も虐待も起きるだろう。では押し戻す家族もなければ、お金もない人はどうなるのか？ 私たちはコロナ中に在宅療養という名の放置をまざまざと経験した。2 割負担になると施設にも入っておられない。今施設は特養に入れてそのホテルコスト（月 15 万円程）の支払い能力のある人か、あるいは支払う必要のない生活保護受給者のどちらかしか入れない。それが施設の実態だ。施設から出なければならぬ高齢者も出てくる。そして訪問診療がおこなわれている。なぜ政府が今、在宅医療を進めているか。それは在宅はコストが安いからだ。在宅誘導は「社会保障費を抑制したい」という動機から推進されている。私も在宅死と在宅療養推進派だが、私は政府と動機が違う。家にいる方がお年寄りにとって幸せだからだ。動機は違うが、同じ方向にむかっている。地域包括というのは医療は医療、介護は介護、生活支援は生活支援という縦割りだったサービスを横串さして一帯任用することが必要な時代がきたということだ。

そして要介護 1、2 を介護保険から外して、地域の助け合い事業でやれと言っている。誰がやるのだろうか。市民の善意につけ込む安上がり福祉だと思う。

「福祉用具も買取」だがレンタルなのはお年寄りの状況が変化するため機種変更してもらえるからだ。買取にしたら売りっぱなしになる。これも大変なことだ。そこに損保ジャパンなども乗っかっている。

私は 20 年以上この調査をやってきたが、在宅一人死はできるという答えが出た。私が証明いたします。この 23 年間のあいだに介護現場は確実に経験値があがり、スキルがアップして人材が育った。今、現場の方たちで訪問看護師の方はこう言われる。「死ぬのに医者はいりません。私たちナースだけで、お看取りができます。医者の仕事は亡くなったあとに死亡診断書を書いていただくことだけです」と。考えてみたら、昔の看取りはみんな家族、素人だった。そして経験してみたら在宅死ってこんなに穏やかなものかとわかってきた。みなさん実績と自信をつけられた。これが介護保険 23 年の私たちの成果であり財産、宝物だ。これはぜひ覚えておいてほしい。

#### ◆ 世代間対立をあおることにももの申す

最後に申し上げたいのが、異次元の少子化対策といひ年寄りに手厚すぎるといって世代間対立をあおっていることだ。「老人は集団自決せよ」という者まで出てきた。こういう世代間対立をあおる言い方に対して、私は若い人にこう言っている。「介護保険のおかげであなたは、親を一人でも安心しておいておけるんだよ。あなたも親から安心して離れていれるんだよ。いずれあなたが要介護になるのは何年後になるかわからないけれども、そのときにあなた自身が安心して老いることができるように介護保険をちゃんと守ってね」と。私たちには、介護保険を守る責任がある。

金がないと政府はいうが、介護保険財政は初年度から黒字続きだ。その上、防衛費 43 兆円だ。その気になれば使えるではないか。年寄りの運命について、年寄りがいないところで決めないでほしい。みなさまどうぞ、要介護になって選挙に出て当選して、車椅子で国会に行ってもらいたい。本当に年寄りを政治の場から追い出すというような動きに抗議していかなければならなくなっている。





# 少子超高齢化・人口減少社会を生き抜くために

登壇者： 樋口恵子氏・富安兆子氏・上野千鶴子氏

**富安** 来年3月に90歳になります。樋口先生と私は2歳違い、千鶴子さんと私は14歳違いです。

**樋口** 今の世の中は、私の言い方でいうと「ファミレス社会」。つまり家族のいない人が圧倒的に多くなっていく社会です。どうしたらいいか。家族でない人も助け合える社会をつくらなければいけないと思います。介護保険はその第一歩に過ぎません。日本は家族が看取る社会から、介護保険が看取る社会とっていいと思います。私がもし外国の人に「日本って誇れるものは何？」と聞かれたら、今の私の心境では「はい、それは激論のすえスタートした介護保険でございます」と答えるつもりでございます。私はこれからの一人暮らしの方を含めて、年をとっていく方々が「昔考えていたよりも、良い時代になりました」と言ってもらえるような社会をこれからつくっていかねばならない。

ホーモイはエスペラント語で「世間」「人々」と言いますが、いろいろな制約が地域にあるなかを今日このような集会を開いてくださった下関の方々、ホーモイにかかわる方々に心からの敬意と感謝を申し上げます。

## ■女性の地位の低さと家父長制

**富安** 母と女教師の会の全国集会全体のコーディネーターをなさったのが樋口恵子さんで、私がはじめて知ったのは50年ぐらい前でした。それから数年後に「これからは母親としての学びだけではなく、人間としてどう生きるかを学んでいかないと絶対行き詰まる」と強い確信のもと、樋口先生に電話で講演をしてもらうように口説きました。そして樋口先生の背中を見て励まされながら、象牙の塔だけにこもっている世の中変わらないぞという思いで後追いついてこられたのが千鶴子さん。バトンをしっかりと受けついで、課題は次の世代にどう渡していくかをしっかりと話していきたいと思えます。

私は国外に行くたびに「日本の女性の地位があれだけ弱いのは、どうしてか」と質問を受けました。日本で憲法も変わり、民法も変わっているものの、民法の根幹のところが変わっていない家父長制にある、そこに気付いている女性はたくさんいると思います。北欧というのは福祉のレベルも高く、女性の地位が高い。つまり女性の地位が社会的に高くなると、必然的に発言権も大きく高くなって、全体が女性の発言に基づいて仕組みを変えていく。今、少子化と心配しているが、女性の地位がそれなりに上がるということは女性の教育の機会が保障されているということです。一人の人間として女性が事の善し悪しを考えられるようになると同時に、社会のことも考えられるようになったらそ



んなに次々に子どもばかり産んでられないです。ついこの前までの歴史を見れば、女は子どもを産む道具だった。子どもを産めない女は「石女（うまずめ）」で、社会的に軽蔑されていた。

次に千鶴子さんとの関わりになりますが、私の書斎のデスクの上に『家事労働と資本制』（岩波書店）という本がボンと載せてありました。それを読んで、私はまさに目からうろこでした。家事労働が怪しいと思っていましたが、きちんと根源的に女性がなぜ社会のなかで生きていくのが生きにくいのか、私なりの感覚にぴったりで論述してくださった方が上野千鶴子さんという方でした。

**上野** バトンタッチはなかなか厳しいですよ。あの本を出したときにあるおっさんが、「上野さんのあの本を読んでね、常日頃うちの女房が言っている愚痴の内容はよーくわかっている」と言いました。バカヤローと思いましたが、読む前に、女房の言うことに耳を傾けるよと。それをやってこなかった男たちが政治をやってきたんですよ。そういう方たちを女性有権者の責任もありますので、これからは女性が意志決定権を持つ側に立って、とりわけ介護保険は何がなんでも守らなければならない。

**樋口** 私たちは高齢者中心の社会をつくれ等とは言っておりません。どういう問題があるかということを知って、決定は国民に委ねていいとは思いますが、当事者年齢がきちんと発言しなければまっとうな政策はできないと思います。私も日本の未来に絶望などまったくしていません。この半年か1年ぐらい、健康状態を害してあまり外を出歩けないようになって、でも機会があれば地方を回っています。それなりに地方に一種の活気が広がっています。これは何だろうと思うと女性の就労率の向上なのです。日本の女の暗さは、若年定



年などといって、わかりやすく言えば早いところ追い出されていたのです。それが諸悪の根源ではないかと思うぐらいに思っております。男と女が同じように働いて、男も同じように家事をするようになったら世の中変わります。

**上野** 私はもっと厳しいと思います。15～64歳までの生産年齢人口の日本の女性の10人に7人が働いています。この就労率は地方のみならず全国で上がっています。理由はなにか。一つは夫の賃金が上昇しない、何が何でも妻の家計補助収入がなくてはならないからです。もう一つは少子化による人手不足で、女性も使わないといけない。ところがこの働き方のほとんどが非正規労働です。家計補助型です。

**富安** なぜ女性に非正規の労働が多いのかということも含めて、きちんと講義してもらわないといけませんね。先ほどから思うのが、このように政治の在り方を概観すると思ひ出す言葉があります。「国民は、国民にふさわしい政府をもつ」つまり私たちがそれだけ、考えて投票行動をしているのかどうか。でも政治は変わります。私たちの選択によって変わります。大事なことは、お金を生きている人たちのために使ってほしいです。人を殺す武器を買うために、お金を使ってほしくない。政治の世界は女性に向かない、地盤・看板・鞆と言われてきましたが、他の国々を見ているとそういう状況にとらわれず女性が活躍しています。しっかりと学びが保障される社会でないとダメで、しっかりと判断できるのは今のところ女性だろうと思います。

## ■介護保険によって現場は進化成長した

**上野** 富安さんがすばらしい檄を飛ばされました。政治が変わると言われましたが、山口から変えて下さい。東京はこの統一地方選で相当に変わりました。今、女性の区議の比率は25%を超え、40%にいったところも

あります。変える気持ちがあれば変えられる。どうぞみなさん、目の前で変えて下さい。

**富安** 日本の多くの女性は、将来BBになるであろう。(貧乏ばあさん)になるであろう。皆さんはその予備軍、それをはらいのけて、豊かに人生を生きていく方策を見つけないですか。ですので『BBの逆襲 長生きすれば働き方も変わる、人生100年時代』という本もぜひお買い求め下さい。

**上野** 樋口さんが、私はけっして日本に絶望しておりませんと言われました。私は23年間、介護保険ウォッチャーをやってきました。私は介護保険が制度として悪くなっている、現場は確実に進化して成長したということは自信を持って証明できます。現場を歩くと介護保険制度を支えている現場の本当に志のある気持ちのやさしい、欲も得もない人たちにお目にかかります。介護の仕事をして介護が好きとおっしゃいます。それだけの人たちを介護保険が育ててきた。だから私は現場を歩く度に、このように草の根でいるあいだは、日本は大丈夫だと心から思います。

**樋口** そういふご発言、本当にありがとうございます。  
**富安** 私たちは戦争を経験しています。戦争が終わって民主主義がやってきたあの喜び、これまで持てなかった希望が持てたのです。だから民主主義社会を絶対に守っていかなければならぬと子ども心に思いました。戦争は嫌です。戦争をしてはいけません。私の兄も学徒動員で亡くなりました。「守るための戦争」というが、「守るための戦争」は必ず「勝つための戦争」に行かざるを得ない。そうなったときに、一度死んだら戻れませんからね。この生命を大事にできるか、それをしつこく申し上げたいです。

**上野** この3人のなかでは私が最年少です。90代の樋口お姉様、80代の富安お姉様がこんなに頑張っておられる。後輩の私たちは、どうぞお姉様たちには死ぬまで頑張ってくださいと申し上げたいと思います。



創立20周年記念事業には多くの皆様のご支援ご協力を頂きまして、ありがとうございました。また、記念誌をNPO法人「高齢社会をよくする女性の会」の会員650名に配布して頂きました。身に余るお言葉やご支援まで頂き、感謝しかありません。

